



Data

監督：フォルカー・シュレンドルフ
脚本：コルム・トビン
編集：エルベ・シュネイ
出演：ステラン・スカルスガルド/
ニーナ・ホス/スザンネ・ウ
オルフ/ニエル・アレストリ
ュブ

■■■ショートコメント■■■

◆『ブリキの太鼓』(79年)で有名なフォルカー・シュレンドルフ監督も、今や79歳。しかし、そんな歳にもかかわらず、いや、逆にそんな歳になったからこそ、ある意味かなり身勝手ながら、心とさめく大人のラブストーリーを！

冒頭5分間、1人の中年男が1人で何かを朗読しているシークエンスが続く。そこでは、「やって後悔すること。やらずに後悔すること。この2つの後悔が人生を形作るのか？」というカッコいいテーマが語られているが、この男は一体何者？

◆その直後、これはドイツからニューヨークにやってきた小説家のマックス・ゾーン (ステラン・スカルスガルド) が新作のプロモーションのために開いている朗読会だということがわかる。ちなみに、ノーベル賞作家が故郷のアルゼンチンに戻って行った朗読会から起きるさまざまなハプニングを描いた面白い映画が『笑う故郷』(16年)だったが、それは本作も同じだ。

しかして、マックスは朗読会のお仕事もほどほどに (?), かつて恋人関係にあった女性レベッカ (ニーナ・ホス) との再会に期待・・・？

◆マックスがそう計画していたとすれば少し不純 (?) だが、本作ではマックスのかつての師匠であったウォルター (ニエル・アレストリュブ) との偶然の出会いと、そのウェルターからの情報によって、マックスはレベッカと再会することができたという設定。もっとも、マックスにはニューヨークの出版社で働いている妻、クララ (スザンネ・ウオルフ) との再会とホテルでの滞在が予定されており、当然それがメインだ。

他方、レベッカはバリバリの女性弁護士として働いていたから、マックスの突然の訪問に困惑？あるいは、それ以上に迷惑？スクリーンは一見そんな雰囲気だったが、一転してレベッカから予想外のモントークへの旅のお誘いがかかると、マックスは有頂天に。そこでマックスは、いつも付き添っている広報担当の女性リンジー (イシ・ラボルド) を使っ

て、クララに対してアリバイ工作を。さすがベテラン作家だけあって、ここらの処置は巧妙だが、マックスとレベッカの2人はなぜモントークへ・・・？

◆フォルカー・シュレンドルフ監督の説明によると、「モントークはアメリカ先住民の言葉で『陸地の終わり』を意味する」そうだ。また、「それは大西洋に伸びていく海岸沿い、ロングアイランドの最東端だ。そして灯台が岬の一番端にある」そうだが、私たち日本人はそう聞いてもそのイメージはよくわからない。さらに、「ポルトガルやブルターニュに似てるね」「常に感情を波立たせる特別な場所だよ。それは陸地が終わる場所」と言われても、容易にはわからない。しかし、本作のスクリーン上に登場するモントークの浜辺を見れば、なるほど、なるほど・・・。

2人が泊まるモーテルが、入口だけ別で内部はつながっているのは興味深いし、何よりもそれが質素でシンプルなのがいい。ベランダからはすぐに裸足で浜辺に出ることができるから、これなら松山で生まれ育ち、小さい頃から海辺に親しんできた私にも、しっかりモントークをイメージすることができる。

もっとも、フォルカー・シュレンドルフ監督が続けて言う「そこで人生が終わるわけじゃない。でも、その地点からは、実際に振り返ってみることしかできないんだ」は、意味が深すぎて、69歳の私にはとても、とても・・・。

2018（平成30）年6月15日記